

急須の焼キズ(製造過程のキズ)と後キズ・・・(常滑焼急須の強度)

常滑焼は、分類上磁器と陶器の間の炆器という分類に入ります。一般的には陶器より硬く磁器より軟らかいということになります。破損するような強い衝撃は別として、焼物では割れるような衝撃でもヒビが入るだけ又は、わずかな衝撃でもヒビが入ることがあります。焼物への衝撃は、圧力のかかる角度や場所により色々な結果がでます。壊れないと認識できないことが多く時間が経ってから起こる結果は、特に認識に誤解を生じます。磁器の飯茶碗や湯呑でもよくヒビが入っているものを使っているのを見かけます。この場合は、ヒビ割れを認知しているが水漏れしないので使っていると思われます。またこのキズが付いた時(衝撃等を受けた)は、真っ白だったと思われます。使っている間に茶渋や汚れでキズがはっきり見えるようになります。しかし色物陶器や常滑の朱泥急須等はヒビに茶渋が入っても磁器製のものより目立ちません、それで見落とすことが多いです。結果ある日突然急須が破損したと言うことが起こります。衝撃を受けた時と破損までに時間差があるからです。ヒビの場合は、気づかない程度の衝撃でも入ることがあります。(いわゆる打ち所が悪かった) 衝撃を受けた場所にも寄りますが、ヒビは薄いところ(弱い)や力のかかる部分に伸びていく傾向があります。キズは、薄かったり筋がついた部分に広がります。急須で一番勘違いの起こるのは底がきれいに抜けた場合です。底は、常に置くことで大小の衝撃を受けます。そこで後から接着したから壊れたと勘違いする方が多いです。底に接着することは、不可能なことですし、もし試みたとしても精密機械並の精巧さが要求される作業になります。

実例 1
右の急須もアイボリー色ですのでヒビに茶渋やよごれが入りはっきり見えますが、朱泥や特に黒泥の急須ではヒビを認知することは難しいです。

* 使っていた急須がある日突然ぶつけた感覚がないのに壊れるということがありますが、それは以前にヒビが入っていたということが多いです。破損するほどの衝撃なら気づきますが、ヒビの場合は、気づかない程度の衝撃でも入ることがあります。(いわゆる打ち所が悪かった) 衝撃を受けた場所にも寄りますが、ヒビは薄いところ(弱い)や力のかかる部分に伸びていく傾向があります。

右の急須は、私どもが使っていてヒビを見つけました。ヒビが入った直後(推定)でしたのでお茶がにじみ出てきました。そのまま使いましたところ翌日は、水漏れがなくなりました。茶渋等で埋まったのだと考えられます。実験のため以後3週間ほど使い続けています。ただヒビは大きくなっています。



実例 2



左 後手 破損品

これは、胴の部分に穴が開いています。胴からもぎ取られた結果です。

右 横手 製造者不良品

これは、焼く前の接着が不十分で、取れてしまった例です。

胴に穴は開きません。

手や口はこのように泥で接着します。



キズ、ヒビの見分け方

手の平の上で軽く叩きますとヒビや傷のないものは、乾いた金属音のような音がします。ヒビのある物は、鈍い音がします。焼物は、焼成温度が高く焼きしまった物ほど金属音に近い高音になります。